

「今を生きる」 (校長便り R2 NO.5)

校長挨拶 (1学期終業式)

私自身、普段心がけているのは区切りで振り返りをすることです。1日の終わり、1週間の終わり、1学期の終わり、1年の終わり・・・わずかの時間で構わないのでぜひ振り返る習慣を身に付けてみてください。さて、今日は1学期の終わり、一つの大きな区切りでもあります。皆さんは1学期を振り返ってみてどうでしたか。

言うまでもなく、この1学期はコロナを抜きに語ることはできません。しかし、失ったものや出来なかったことがたくさんあった一方で、気付いたことや得たものも多かったのではないのでしょうか。私自身、あらためて気付いたことは、やはり普段何気なく過ごしてきた日常の有難さです。皆さんが学校で授業を受けたり、部活動に励んでいる様子。家で家族と交わす何気ない会話。そんな日常の一つ一つが心から愛おしく感じられるようになりました。

それでは、1学期の終業式を迎えるにあたって、一つお話をしたいと思います。先日、7月23日でしたが、競泳の池江璃花子選手が世界に向かってメッセージを送りました。4連休中でもあったので、ニュース等で見た人も多かったのではないのでしょうか。池江選手は現在20歳、皆さんと同世代です。本来であれば、翌7月24日には、東京オリンピックの開会式が行われるはずでした。ところが、コロナによって1年延期という前代未聞の事態となりました。オリンピックに限らず、世界中でコロナによってこれまでの生活や人生が一変してしまった人は多いですが、池江選手自身も白血病によって、当たり前だった日常がある日突然一変してしまいました。

メッセージでは、池江選手自身が大変な経験をしたからこそ感じる事ができた、平和な日常や周囲の人々への感謝の気持ちがしみじみと語られています。そのメッセージの中で、私が一番心打たれたのは、こんな言葉です。

「今日、ここから始まる1年を単なる1年の延期ではなく、“プラス1”と考える。」

池江選手自身も言っているように、これは未来志向で前向きな、本当に素敵な考え方だと思います。

池江選手は最後にこう語っています。

「逆境から這い上がっていく時には、どうしても希望の力が必要。希望が遠くに輝いているからこそ、どんなにつらくても、前を向いて頑張れる。」

コロナに限らず、災害やあるいは病気や怪我など様々な原因でつらい思いをしている人たちが世の中にはたくさんいます。皆さんもコロナによってこれまで不自由な生活を余儀なくされてきました。そして、それは現在進行形であり、先の見通しも立たない状態です。しかし、そんな中で現状を憂えるのではなく、そんな時だからこそ夢や希望を持つことが、よりよい人生を送る原動力になるのではないのでしょうか。

皆さんにとってかけがえのない高校生活、悔いのないように過ごしてほしいと心から願っています。

令和2年8月4日

兵庫県立生野高等学校長 福田 孝善

